

# シルク・ドウ・ソレイユの『トーテム』と先住民表象

室 淳子

十二月初め、名古屋で行われたシルク・ドウ・ソレイユの『トーテム』を学生たちと見に行った。シルク・ドウ・ソレイユの公演を見るのは二年前の『オーヴォ』に続いて二回目だが、学生たちの反応は今回の方が良かったようだ。その理由の一つは、おそらく座席の位置にあると思う（『トーテム』は円形に舞台が設置され、どの角度からも見やすい構造になっている）が、卓越したパフォーマンスとともに、公演のテーマのメッセージや道化役のコミカルな演技の親しみやすさも見る側にとっては魅力であったと思う。

シルク・ドウ・ソレイユ（フランス語で太陽のサーカス）は、カナダのモントリオールを発祥とするサーカス・カンパニーである。もともとはケベック州のベ・サン・ポールという小さな町で口から火を吹いてみせるストリート・パフォーマンスとして活躍をしていたギー・ラリベルテらのフェスティバルの企画に対し、一九六〇年代の「静かな革命」以降ケベック文化の推進を図るケベック州政府が助成を行う形で話が進められ、一九八四年に「ケベック初・ケベック発のサーカス」としてシルク・ドウ・ソレイユが創設された。

ヌーヴォ・シルク（新しいサーカス）と位置づけられるシルク・ドウ・ソレイユのサーカスは、従来のサーカスのイメージを大きく変えたことで知られる。町から町へと渡り歩きながら人や動物の曲芸を見世物にする従来のサーカスには哀れみや貧しさの影がつきまとい、人々の娯楽の多様化や動物愛護的な観点からの批判を受けて人気も低迷しつつあっ

た。シルク・ドウ・ソレイユは、従来のネガティブなイメージを一蹴させ、飼育や調教の手間やコストのかかる動物の使用をやめ、従来のサーカスの要素の中から、サーカスならではの楽しさやスリルを味わうことのできるピエロ、テント、アクロバット演技の三つをより洗練させた形で残した。一つ一つの作品にテーマとストーリー性を持たせ、知的な興行きと芸術性を持たせることで、観客の対象を子どもから大人にシフトし、ダンス、演劇、音楽、TV、マルチメディア等、多分野の要素をふんだんに取り入れた。シルク・ドウ・ソレイユのショーの多くがノンバーバルであり、スター・パフォーマンスを擁しない点も特徴的だ。そのことにより芸術性が高まるとともに、代役も可能であり、世界各地で演じても通用する舞台を作り上げることができるのだ。モントリオールはダンス、演劇、音楽等の芸術分野に強く、一方で既存のサーカス・コミュニティを持ち合わせていなかった。新しいものを受け入れやすいカナダの特性を生かし、七十三人のスタッフとパフォーマンスから始まったシルク・ドウ・ソレイユは、多分野からのクリエーターとともに、五十か国を超える多国籍のアーティストを抱え、二十五以上の言語がメンバー間で交わされていると言う。シルク・ドウ・ソレイユは、ラスベガスやロサンゼルス等、専用の劇場を設置して行う常設公演と、世界の各都市をめぐる巡回公演とを行っている。日本においては、一九九二年の『ファシナシオン』を始めとして、『トーテム』を含めた十二作品の巡回公演がこれまでに行われ、二〇〇八年十月から二〇一一年十二月には東京デイズ

ニerland内での劇場において『ZED』の常設公演が行われた。

シルク・ドゥ・ソレイユはビジネスモデルとしての評価も高い。コストを削減し、バリュエーションを高めて従来のサーカスとの差異化を図ることで新たな市場を切り拓いていったブルー・オーシャン戦略や、大人をターゲットにすることで引き上げられた前売り制のチケット代金を常に手元に確保することで可能となる潤沢なキャッシュ・フロー経営、また事業展開においては、ラスベガスやマカオの高級ホテルとの提携や世界各都市の企業委託によるパートナー戦略の成功に高評価が与えられている。また、シルク・ドゥ・ソレイユは、環境や教育をめぐる社会活動への関心の高さにも定評がある。モントリオール北部のサン・ミシエル地区はかつてのごみの埋め立て地があり、失業率の高い最貧地区であったが、一九九七年、シルク・ドゥ・ソレイユはそこに国際本部を設置すると、サン・ミシエル環境総合施設におけるリサイクル整備と雇用の促進、サーカス・スクール運営等の地域の活性化を図っている。さらに、一九九五年以降、十五か国の貧困地域でサーカス教室を開き、非行に走りがちな若者たちに自己表現の場を提供する教育プログラム（「シルク・ドゥ・モンド」）を展開し、二〇〇七年には、途上国において安全な水の提供を行うための「ワン・ドロップ財団」も設立している。

『トーテム』の日本公演は、二〇一六年二月の東京公演を皮切りに、大阪、名古屋、福岡を巡回し、最後の仙台公演を二〇一七年五月まで予定している。二〇一〇年のモントリオール公演を初演とする『トーテム』は、カナダの劇作家ロバール・ルパージュが脚本と演出を手掛けた作品である。ルパージュは、シルク・ドゥ・ソレイユの舞台『KA』（二〇〇四年初演）の制作にも携わっているが、例えばアングロフォンとフランコフォンを抱えるカナダの二つの文化圏をめぐってカナダ版の『ロミオとジュリエット』（一九八九）を制作したり、ケベック州ウエンダケの先住民保留地において『テンペスト』（二〇一一）を上演したりする等、古典作品の再解釈や、新しいメディア・テクノロジーを積極的に取り入れた舞台創作等、内容においても手法においても、様々な実験的な試み

を繰り返している。

『トーテム』は、「異なる種」と「進化の歴史」をテーマとし、魚類や両生類から人類に至るまでの進化と様々な生き物の生きる場としての環境を描き出す。進化を優劣として描くのではなく、人間が持ち合わせている動物的な要素をパフォーマンスの身体に表現させることで人間の発達段階の中に生物の進化の過程が凝縮されていることを示し、さらなる変容と飛翔の可能性をサーカスを通じて追求しようとする。吊り輪、空中ブランコ、一輪車、ローラースケート、フット・ジャグリング、ハンド・バランシング、ロシアン・バー等のパフォーマンスとともに、幾つもの異なるストーリーとメッセージが組み合わされる。また、プロジェクト・ジョン・マッピングが多用され、湿地、沼地、湖、海、火山、星空等、世界各地で撮影された映像が映し出され、作品のイメージを醸し出している。

『トーテム』という演目名自体が先住民文化とのつながりを想起させるが、舞台の様々な場面に北米先住民の伝統文化に基づく要素が登場するのは興味深い。ステージを形作る亀の腹甲、大きく設置された亀の甲羅、二人のフープ・ダンサーによるダンス、ウエンダケのミュージシャンであるクリスチャン・ラヴォによる太鼓の演奏と歌、羽根や太鼓、カヌー等の小道具、衣装等。ルパージュは、トーテムポールの動物の重なりにも創作のインスピレーションを得たと語っている。『トーテム』において先住民文化に高い価値づけが行われているのは確かだ。舞台には科学者の姿や宇宙飛行士の姿も登場するが、明らかに異質なものとして映るそれらの存在とは対照的に、先住民は調和を示し、人と生き物とのつながりを連想させ、科学に対するアンチテーゼ、現代の我々に対する批判ないし提案としても位置づけられるようだ。先住民文化の称揚は、ともすれば知られぬままに先住民の文化を現前に出す意義があると思われる。とりわけ、『トーテム』が世界各国で上演される演目だけにその意義は大きいだろう。

ただ、その意義を十分に理解した上で、現代の先住民作家やアーティ

ストたちの作品に多く触れてきた立場から考えれば、いくらか心残りに思う部分があるのも確かだ。というのも、先住民作家やアーティストたちの作品には、過去への言及や伝統の尊重が含まれるとしても、必ず「現代」の視点が含まれ、先住民の「今」が語られるからだ。先ほど「現代の我々」という表現を使ったが、その「我々」に先住民は含まれないのか。「進化の歴史」をテーマとする中で、先住民は進化の側つまりは文明の行き進んだ側に組み入れてもらうことはできなかったのか。美しく表象されるばかりでなく、例えばごみを捨てる側の現代人として含められることはなかったのだろうか。融合や越境を謳うシルク・ドゥ・ソレイユの舞台において、先住民は融合や越境を許されなかったのか。ある批評家が述べるように、先住民が科学者として描かれても良かったのではないだろうか (McAllister)。

これらの疑問はもちろん単純にすぎないかもしれない。『トーテム』の先住民に現代性が皆無だとは言えないからだ。舞台上立つ先住民ミュージシャンとダンサーは、その存在もスキルも歌声も、家族から受け継がれて磨き上げられた現代のものであるのは間違いない。ラヴォの歌声は鳥の鳴き声や川のせせらぎを作り出すシンセサイザーの音に合わせられ、他のミュージシャンたちの演奏にも加えられる。二人のフープ・ダンサーが五つの輪で形作る地球も現代の視点でなければ作り得ないものであるだろう。音楽においても、舞台のセットや小道具を含めた演出においても、インドやアフリカ、中国等、様々な文化との並置や融合が行われているのも分かる。あるいはショーの周辺を見回せば、会場のロビーには『トーテム』を解説するビデオ映像が流され、舞台について語るラヴォの英語を聞くことができ、パンフレットを開けば、Tシャツ姿のラヴォの写真とコメントも、フープ・ダンサーのエリック・ヘルナンデスとシャンディーン・ソソワイ・ロランスのメイクなしの写真も目にする事ができる。メイクアップの時間が「エリックから『トーテム』のフープ・ダンサーに変わる時間」(Eric)と語るヘルナンデスの言葉のように、先住民メイクが舞台という空間での変装であるのは確かだ。『トーテム』

に登場する、携帯電話を持つスーツ姿のビジネスマンや科学者、軽薄そうなイタリア人風キャラクターがひとつの象徴として描かれるように、先住民文化もアーティストも、『トーテム』を構成する象徴的なアイディアを演出するものだと言うこともできるだろう。

もちろんそうではあるのだが、ひよっとするとこのような演出を加えることはできなかっただろうか。例えば、ラヴォが普段のTシャツとジーンズの短髪姿で登場し、フランス語や英語のポップソングもいくつか歌ってみるとか、ロランスが二〇一三年にサンタフェのインディアン・マーケットで仲間たちと出場したヒップ・ホップ・フープ・ダンスを途中に組み入れてみるとか (2013 SWAIA)、少数の先住民アーティストではなく、もう少し多い数のアーティストで多様な先住民の姿を映し出し見て見るとか。『トーテム』では、汚れた川から釣り上げられたごみが鳥に変わって羽ばたき、進化の象徴とされるスーツ姿のビジネスマンがスーツを脱ぎ棄てて原始人を槍で追いかける場面等のように、一面的な理解を打ち破り、進化のサイクルをもう一度回して再生や内なる野生を示すような工夫が設けられている。先住民の表象においても同様に、パタリと姿をひっくり返して、もうひとつの姿、現代性と伝統との融合を見ることができたかもしれないだろうか。

そのような演出は先住民文化の真正性を崩してしまうだろうか。しかし、『トーテム』に出演する先住民アーティストは、舞台の外の姿を調べれば調べるほど、その歌声やダンスが魅力的に映る。日常性を引き出す試みは、多くの先住民作家やアーティストたちが盛んに実践するところでもある。例えば、ドリュユー・ヘイデン・テイラーはエッセイにおいて、金髪碧眼の自身の写真を好んで載せ、先住民がよく食べるものとしてピザを挙げ、マカロニスープは典型的なカナダ先住民の食事だと語る。作品においても同様に、先住民の一举一動にスピリチュアルな意味合いを見出そうとする若者や母親の死をきっかけにビジョン・クエストを試みる少年等、真正性を求めるキャラクターを偽画化し、ポピュラーカルチャーの影響を受けた先住民の日常を提示する。古典的などころでも、

レスリー・マーモン・シルコウの『儀式』は、伝統的なメディアシンマンではなく、多様な文化背景を重ね持つメディアシンマンに主人公が回復するきっかけを与えさせている。現代性や複数性の表示は先住民文化を表象する北米の多くの博物館が実践するところでもある。国立アメリカンインディアン博物館（ワシントンDC）のビーズ刺繍を施したローラースケート靴は有名だが、映像や写真を含め、老若男女の複数の人たちの姿が各所に登場し、先住民の「今」を伝えようとするのも興味深い。二〇〇七年にニューヨークの国立アメリカンインディアン博物館で行われた展示会『ReMix』も、新しいメディアを取り入れながら複数の文化背景を持つ若者文化が多くのアート作品に映し出されて興味深かった。

先住民の表象にあたっては、アプロプリエーション（横領）の問題がつきまとう。誰が表象するのか、正しく表象されているのか、先住民側の同意や許可はあるのか。これらの問題は、一方的に誤った表象が続けられてきた歴史を鑑みれば、至極当然であると思われる。先住民の表象に慎重が必要であることは重要だが、しかし、真正さを強調するあまりに、ユーモアを含めた実験的な試みが全く行われないのは残念でもある。一九八六年のトムソン・ハイウェイの『居留地姉妹』以来、北米先住民の演劇活動は注目を集め、一九九〇年代半ばにかけて全盛期を迎えた後も、幾多の劇作家たちによる創作が続けられている。とはいえ、その多くの舞台が広く上演される機会は残念ながら少ない。シルク・ドゥ・ソレイユが国際的に知られた舞台であるがゆえに、せつかくならば先住民作家やアーティストたちのような実験的な試みを取り入れてくれればより面白かったのと思う。

(むろ じゅんこ)

【参考文献】

姥谷敏「シルク・ドゥ・ソレイユ デイズニ―感服の創造力」『日経ビジネス』

二〇〇八年十月二〇号、四〇―四四頁。

小畑精和『カナダ文化万華鏡―「赤毛のアン」からシルク・ドゥ・ソレイユへ』明治

大学出版会、二〇一三年。

神崎舞「越境するサーカス―ロベール・ルパージュ演出シルク・ドゥ・ソレイユの『トータル』―」『フィロカリア』二九巻、二〇一二年、五五―六七頁。

W・チャン・キム、レネ・モホルニユ「シルク・ドゥ・ソレイユブルー・オーシャン戦略」『ダイアモンド・ハーヴァード・ビジネス・レビュー』二〇〇七年、六九―七一。

Cirque du Soleil Japan Tour Souvenir Program. Fuji Television Network, Inc., 2016.

“Eric Hernandez from Cirque du Soleil.” *American Latino*. Feb. 4, 2014. Online.

McAllister, Janet. “Janet McAllister: Let Down by ‘Lazy Stereotypes.’” *The New Zealand Herald*. Aug. 31, 2014. Online.

“2013 SWAIA – Hip Hop Hoop Dance Fashion Show.” Sep. 11, 2013. SWAIA Santa Fe Indian Market. Online.